

# 80年代の小説にみる 中国社会の問題点 その一

堀 黎 美

## Reflex of the Chinese Social Problems on the Contemporary Chinese Literature Part 1

Reimi HORI

### In Reference to Her Modernization

The government political positions prevailing at each specific period of various administrations are inseparably reflected in the Chinese literature after the Revolution. However, The time when the people, the youth in particular believed innocently in what was written is over.

People, little by little, have opened up their own natural mind. This is also true in the literary works.

Taking the above positions into account, the present writer has investigated this tendency regarding more than 100 literary works written after the 1980's Those problems facing the Chinese current situation are picked up and characterized.

This paper shows how deeply those problems are connected with matters that served the reasons for the realization of the Chinese Revolution, as well as the subsequent Chinese Cultural Revolution.

In the first part of this paper, these problems are analysed based on examples of those literary works dedicated to the social modernization of the country.

は じ め に

隣国の中でも日本にとって中国は歴史的にも最も関係の深い国であるし、昨今はことに往来も繁くもたらされる情報も飛躍的に増大しているが、それでも中国の人々が毎日何を考え、どういう状況のもとで暮しているのか知られていないことは多々ある。政治体制は異なっても人間の住む社会であるから、中国も当然多くの問題を抱えている。それらの問題点や現状を80年代に入って発表され、かつ優秀作に選ばれた中短篇小説を中心に探してみたい。中篇とはいっても日本の

長篇を越す分量の作品もあって話題作が集中しているし、80年代以後としたのは現在の中国社会の動向に最も関心があるからであり、また中国の文芸のおかれている特殊状況による。たとえば、日本の小説は人間（擬人化されたものを含む）の他者（自己の内面をも含み、かつ必ずしも人間とは限らぬ）への関わりを描くが革命後の中国では一貫して人間と政治との関わりが描かれ、小説のモチーフが恋愛であれ、友情であれ、はたまた社会事象であれすべて政治との関連抜きに描かれることはなく、真のテーマは政治、それも時の政策の意を体したものであり、「文芸は政治に奉仕するもの」との毛沢東主席の規定により、党の方針に合致しない作品はよしんば発表されたとしても厳しい批判に晒される運命にあった。従って革命後の文芸作品は年代ごとに輪切りにできるほどで、50年代は解放の謳歌、60年代後半から70年代前半にかけては文革賛美、毛沢東死後の70年代後半は文革の傷を描く傷痕小説の氾濫で、80年代に入ってやっと文革の傷を告発するのみでなく57年の反右派斗争、58年の大躍進時から打ち続く政治の嵐に翻弄されることに疲れきった人々が、人間の生活を取り戻そうと、一定の制限下ではあっても徐々に本音を声に出すようになってきたという経緯をたどっている。

かくして100余篇の作品に目を通した結果、現代中国社会の諸相がかなり浮彫にされてきた。目下中国が国を挙げて取組んでいる現代化（日本では近代化と訳されているが）は当然小説中にも大きく投影されている。現代化とは具体的には人々にとってどんな意味をもつのか、まずとりあげてみたい。

1949年10月1日は中華人民共和国の成立した日であり、中国ではこの日以前を解放前、以後を解放後という。何からの解放かというと直接には国民党政権の支配からであるが、諸外国、特に日本軍国主義の侵略や封建制度の軛など、人間性を疎外するものを断ち切って人民が国家の主人公となった日とされている。その日を境に人民は果して国家の主人公になったのであろうか。

解放後3ヶ月で50年代に入る。現在40代後半以上の中国人は「50年代の始めは本当に素晴らしい社会だった。人々は互いに信じ合い希望に満ち溢れていた。だが今はすっかり変ってしまった」と口々にいう。素晴らしい社会はなぜ数年を経ずして変質してしまったのか、最大の原因は絶える間のなかった政治斗争である。

57年に反右派斗争が始まり多数の知識人、良識派が右派と断罪され行動の自由を奪われ発言を封じられた。

58年には大躍進が声高く叫ばれたが失敗に帰し、毛沢東の威信は低下し劉少奇、鄧小平派の影響力が増した結果、自分の目指した革命とは異なる方向に中国社会が行きつつあると見てとった毛沢東が巻き返しを図ったのが66年に始まりその後10年にわたって動乱の様相を呈した文革であった。

文革の影響を受けずに済んだ中国人は皆無といってよいほどの未曾有の大動乱は、究極のところ何を目指していたのか、故人の真意は今となっては知る由もないが、革命後数年を経る間に共産党内外や社会に必然的にたまってきた澱を流し落す必要も、当然生じていたものと思われる。

毛沢東には生前から多くの呼称が奉られている。真紅な太陽、偉大な指導者、偉大な舵取り、偉大な教師……彼自身敢て辞退した様子もないこれらの呼称から考えてみれば、つまるところ彼は革命を常に自分の掌中に置いておきたかったのかもしれない。“教師”として中国社会を自分の思う方向に導くことが可能だと信じていたのかもしれない。

ともかく文革のもたらした無数の災害、わけても人心の荒廃は回復にかなりの年月を要することは確実である。例えば張賢亮は“男人的半は女人”\*の中で主人公の口を借りてこういつている。「‘文化大革命’がまっさきに破壊したのは国家ではない、我々中華民族の道徳をめちゃくちゃにしたのだ。これは何百年にもわたる禍根を遺したことだ」

そして文革は終熄し劉少奇、周恩来、朱徳、毛沢東とあい次いで世を去り、鎖国状態で斗争に熱中していた間に、すっかり世界の歩みに取り残されてしまったことに気づいた中国が、その後諸外国に追いつくためにはどれほどの時間を要するのか、前途は厳しく進歩を阻む要因は多い。そしてその要因は文革を起す原因となったもの、文革の方向を規定したもの、更に遡って中国が革命をし自から解放しなければならなかったものと共通の根を持っていることに気付かされる。

結論を述べる前に、中国の人々が現代化を達成するためにはまず何をどうしなければならないかを描いた作品を若干紹介してみよう。

## 現代化の周辺

まず劉心武の“日程緊迫”\*から、

83年初秋、W市のホテルの一室で陶士銘がS・Y方面技術情報交流会開催を翌々日に控え、準備に忙殺されている。彼はこの全国会議の主催者で全国から22名の専門家が参加し、特にX省の馬繼程が極めて重要な発表をすることになっている。政府は来月某国と設備導入の談合を開始するため、G型かQ型の選択の資料を早急に提供しようこの会議に要求している。

そこに到着したのがX省S・Y方面技術情報局第三副局長薛燕培62才。もと省農業局7人の副局長中のひとり。定年退職を前にして現ポストに着いた人物でもとより情報技術に関して何も知らない。しかし党員歴は古く等級も会の参加者中最高の13級である。彼は到着時刻をわざわざ打電したにも関わらず駅に出迎えたのが陶士銘でなく、若い女秘書がジープで来たので不快を隠さない。折しもW市は観光シーズンで外国人も多勢訪れており、ホテルとタクシーは払底して止むを得ず秘書が個人的関係を通じ贈り物もしてやっと軍から借り出したジープなのだが、薛副局長は出迎えの遠縁の青年の前で13級幹部の体面を失墜させられたと思い、秘書を睨みつけ甥と行ってしまふ。薛燕培とすれば長年革命事業に携わってきて半年ほど前やっと13級に昇格したばかり、14級の10数年間は“上海”で我慢した。今は“上海”から“トヨタ”になったが13級は“クラウン”に乗る資格を意味する。親戚の住むW市で“クラウン”を乗り回す自分の威力を見せたいのは当然ではないか。大体彼にとっては今回の会議の内容など何の関心もなく、ただこの機会を利用して親戚に会い名高いW市を見物するため、X省代表の馬繼程を党の命令として郊外の植樹に追いやり自分が出てきたのである。ホテルに着いても面白くない事態が続く。まず部屋。

陶士銘と合部屋では親戚を呼んで次々に風呂を使わせるのに不便である。馬継程用の部屋には電話もない（中国人宿泊用の部屋は数室共用の電話が多い）のでは親戚とどうやって連絡するか。すったもんだの末、陶士銘を馬継程用の部屋に行かせて自分が一室を独占すると絶え間なく電話がかかり、なぜ主催者がいないのか追及される。会議のプログラムには末尾にボールペンで彼の名が書き加えられているだけ、当然開会初日の冒頭に薛局長（中国の習慣で特に副とつけない）講話を入れて印刷し直すのが礼儀ではないか。頭に来た彼は臨時党細胞会議を結成し主導権を握ろうとする。

陶士銘は機種選定のみのわずか22名の専門会議で政治性を帯びた会でもなし、上部組織からもそんな要求はされていないのだが、結局同意する。参加者中黨員は全部で5人、薛副局長は女秘書に退席するよう要求するが彼女も黨員、それもかなり古い党歴の持主でテキパキと書記の人選をし、薛燕培の思惑は外れ、皆は手早く細胞会議を片づけ、本命の機種選定会議の運営について話すため、全員別室に行ってしまう。

陶士銘は薛副局長の出席を最初は歓迎していたのである。だが遅れて来るのだとばかり思っていた馬継程が実は来ないと知って愕然とする。たまたま国外から衝撃的な資料が入り運営委員会で話し合った結果、やはり重要な鍵を握る馬継程の参加がどうしても必要と全員一致で決まり、すぐX省に電話して馬継程を呼ぶように薛燕培に要求するが、レジュメを持って来たので本人が来る必要はないと断られる。そのレジュメ、親戚の青年が駅の荷物預け所に置いたまま番号札を持ち帰ってしまったため、取り戻すまで秘書がかけずり回ったのだが、頁を揃えてみると中心の2頁をX省に忘れて来たらしく意味が正確につかめない。皆の緊迫した表情に副局長がやっとX省へ電話し、植樹に行かせた郊外の地まで人をやって馬継程を探させた時には、馬継程は行方不明になっている。彼は失踪してしまったのだろうか。ここでこの小説は終わっている。

薛副局長は、1. 職権乱用、2. 公私混同、3. 規則違反、4. 特権意識過剰、5. 女秘書に対する侮辱等々、さまざまな誤りを犯している。薛燕培を小説上の誇張された造型と思う人は中国社会にくわしくないからである。現実には薛副局長に代表される幹部のいかに多いことか。少くともいかに多かったことか。

薛燕培の犯した誤りは単に誤りではすまない。作者は陶士銘の口を借りて糾弾する。

「あなたは、私がどんなに焦っているかお分りにならないのですか。機種導入の談合は来月行なわれるのですよ。部（日本の省）は私達が最上の選択をするのをまさに待ち望んでいるのです。私達は7日間でこの任務を終えねばならず、1分1秒を争っているのです。私達の提案が間違っていたら談合に影響し、導入に影響し、ひいてはわが国のこの方面における設備水準は、またまた落後してしまうでしょう。これは単に外貨の浪費だけでなく国家の時間をも浪費する、中華民族に対する犯罪なのです。あなたにはなぜこんなことさえお分りにならないのですか。日程はさし迫っているのです。時間はないのですよ」（p258）

これは心ある人の、無数に存在する薛副局長への言葉でなくて何であろうか。

つぎに紹介するのは謹容の“真真假假”＊

この小説の舞台は、文革中に解散させられ、最近（83年10月当時）復旧再建された社会科学院外国文学研究室で、所属する許明輝という人物が発表し、評判のよかった「外国文学の諸流派紹介」という一文が省党委員会趙部長の目に触れ、思想的に好ましくないと批判され、部長の意を受けた省社会科学院弁公室主任吉子寛の要求で3日間にわたり開かれた“学習会”の情景を中心に描かれている。

許明輝は57年の反右派斗争時からずっと苦汁をなめさせられてきた学究で、中国語でいう“書呆子”。社会生活全般にわたって無器用な男である。研究室は他に同じような経歴の持主呉天湘や党支部書記楊昌明、外国語にも文学にも関係なさそうな人物や大幹部の娘なども所属する中国社会の縮図である。過去に何度も恐ろしい批判を経験している許明輝は“学習会”の開催に当惑している。問題の文は客観的に外国の文学諸流派を紹介したにすぎないのに「問題は立脚点である。外国文学に対し如何なる態度を持つか、如何なる観点で研究するか(中略)。我々はやはりマルクス主義の立場、観点、方法を堅持しなければならない。もちろん現在思想解放は不充分だし必要だが、それには限度がある。外国の先進的科学技术、管理技術、経験は導入しなければならないが、文学や芸術のあの派この派、なんとか超現実主義など学んでどうする。現実主義は現実主義。大体テレサ・テンだのパンタロンだの、これ以上まだ乱れ方が足りないのか。外国文学研究者が不用意にあの派この派などを持ち込めばどうなるか、将来に及ぼす影響を考慮しなければならない」(p61)と吉主任にいわれ、許明輝は((今後外国文学紹介はどう書けばよいのか、一昔前のように何でも一緒くたに罵倒していればよいという訳にはいくまい。比較的客観的に紹介してさえ駄目なら、今後どう研究し、どう書くのか)) (p85)と悩む。他の人々も内心あるいは陰では趙部長や吉主任に反論するが、会議の席では「趙部長の指摘は時宜に適しており正しい」と発言し、許明輝自身でさえ同様に表明せざるを得ない。ただ大幹部(昔から吉主任の上司)の娘秦童童だけが「自分じゃ無骨だからとか言っているけど、どのみち素人なのよ。一体趙部長に外国文学が分るのかしら。現代派やシュールレアリズム、ブラックユーモアの代表作を読んだことがあるのかしら。文芸処の人の報告を聞いただけじゃないの。だから‘ブラック’なんて字がついただけでこれはきっと悪いものだ、批判しなければ……と思うのよ」(p100)と逆襲する。彼女には父親のバックがあるから吉主任も歯が立たない。

しかし会議を通じ吉主任の外国文学に対する無知、そして外国嫌いも明らかになっていく。先進技術以外外国のものはすべて不要と考えていることも。

最終日、それまで沈黙を守っていた呉天湘が「趙部長の批評が正しいとは認められないし、社会科学院党委員会がこのような学習会を設定する必要も認めない」(p131)と発言し趙部長、吉主任を批判したうえで、皆が趙部長の指摘は正しく時宜を得ていると肯定したことも、4人組の時代ではないのだから、偽りを口にするのは止めるべきだと主張し、文学の研究に批評は不可欠だが、趙部長の批評は研究室の空気を緊張させ、外国文学研究の発展に不利だと明言する。

遠からず淘汰されるであろう前出の薛燕培よりこの趙部長、吉主任の如き存在は更にうっとうしい。この小説中で素人が玄人を指導する問題も取上げているが、低い視野と自分の好みを党の判断とすり替える幹部の存在は中国社会の活性化、現代化の大きな障害となっている。

中国の人々は中華思想など存在しないという。確かに中国が世界の中心といった意味の中華思想は現在持ち得ないかもしれないが、古い歴史と文明を持ち続けて来た誇りは高く、それが往々にして排外思想に結びつき易い。趙部長、吉主任を代表とする「外国から輸入する必要があるのは先進的技術のみ」と考える指導者層は多い。技術とは単独であり得ず思想の裏付けを有することは全然考慮しない。外国の文化は中国を毒すると考えて知識や情報を制限する風潮は“由らしむべし、知らしむべからず”を思い出させ、庶民はまた意識的、無意識的に“長いものには巻かれろ”で対応している。こうした状況を青年はどう見ているか。劉心武の“登麗美”<sup>\*</sup>は改革を志す娘達を描いている。

私は人心を鼓舞する新しい社会主義的人物のルポルタージュを書くためさる市場に赴き、副支配人から牛世襄という老店員を推荐される。彼は解放後の社会に深く感謝し、ボーナスも受けとらず、無料医療も辞退し、自分で買った売薬で我慢している。これぞ国家の主人公として見上げた心がけの持主。それに反し今どきの若い娘は夜間私立の洋裁学校に行く費用も市場に負担してと要求してくるが、とんでもないと副支配人はいう。私もそれはひどいと思うが、たまたまその登麗美というあだ名の若い娘と知り合い、洋裁学校へ行っているのは、この市場の服装部門が技術者不足のため客の要求に応えられず、旧態依然としたデザインで人々の要求と全くずれていて売り上げが伸びない。だから自分達はこの問題を改善するため、日本の立体裁断を勉強中で、学費を負担しきれない仲間にかわり、市場側に援助して欲しいと頼んだのだと分る。彼女は、牛さんは確かによい人だけれど、ただそれだけの人。ボーナスや無料医療は先人労働者が勝ち取った権利だから、それは当然受けて自分に投資し、拡大再生産に向けてこそ、社会主義に貢献することだし、国力の増強になる。牛さんの農民根性、視野の狭い消極性を賛美し、技術習得への費用——知識への投資を惜しむ副經理達の存在は市場の発展の障害だと言い放ち、驚く私に「(文革も歴史上の一つの出来ごとにすぎない) 私達は、改革の一代、行動する一代なのよ」(p40)と颯爽と立ち去る。

旧態依然たる幹部のやり方に反撃を試みる青年達を題材としたものの中では、蔣子龍の“赤橙黄緑青藍紫”が面白いが、つぎに現代化実現に成功した幹部の物語を紹介しよう。

#### 蔣子龍の“燕趙悲歌”<sup>\*</sup>

晩秋の剃刀の如き夜風に吹かれ更けゆく村を、ボロをまとい、怒りと絶望を湛えた目付で男が彷徨している。大趙庄の責任者、党支部書記の武耕新で、すでに3夜をこのように過している。3日間にわたって村民大会が開かれ、300もの意見が、放たれた矢の如く彼につきささる。4人組が打倒されて既に1年余、しかし大趙庄は依然として極貧状態にある。その責任を問われ自分が

何の因果でこんなに苦しまねばならないのか、夜闇の中で自問自答しているのである。

武耕新の家では長男の嫁が「大趙庄は貧乏だから3年糠を食べても嫁には行くなよって、まわりの村じゃ言ってる」と大声で話しているのを聞き、武耕新の妻林元秀は腹を立てている。彼女は賢妻で家を顧みる暇のない夫に代り5人の子供を育ててきた。息子はその母にいう。「おやじはいっそ大隊（生産大隊のこと）書記をクビになりゃいいんだ。さもなきゃ自分でさっさとやめろさ。あれだけ苦労して文句ばかり言われていることはないよ。村一番の有能なおやじと俺達の力を合わせれば、ずっと楽に暮せるじゃないか」（p10）

夜道を彷徨していた武耕新は太い榆の老木に行き当る。解放前大趙庄にはこの榆を含めて3本しか樹がなかった。彼は村の来し方を思う。僅かな高粱と唐もろこししかとれなかった酷い土地。大隊の責任者になって5年、皆と一緒にモッコを担ぎ骨身を削ってきた。収獲も数倍に増えているし、この土地に対し申し訳ないことは何一つしていない。ここは自分の生れ育った村、46才になった今過労で死んだところで本望ではないか。俺のすべきことはまだ終わっていない。

彼は将来の大趙庄を思い描く。村を貫くアスファルト道路、数十のコンクリート製灌漑用水路、これが完成すれば水も電気も節約できる。果樹園も開きたい。荒地の開墾も続けなければ。機械を入れれば効率的だが。養魚池、養鶏場、養豚場……すべて費用がいる。お金、お金、問題の鍵はすべてお金だ。彼はこの村を立て直そうと決心する。そして翌日「あと3年自分に賭けて欲しい」と村人に宣言し皆の同意を得る。

彼は手始めに生産隊を解散し専業負請組を作り、ダム、葦刈り、車海老養殖用の穴掘りなど国の仕事の負請から始める。収入の70%は大隊に30%は各人にの条件で1日15元から20元になると聞いて人々は喜んで出かけていく。武耕新のバックになっているのは県の副書記熊丙嵐である。

ダムとは名ばかりの湿地へ葦刈りに赴いた大趙庄の人は他村の者に比べよく働く。大体この苦しい仕事に裕福な村から参加する者はない。1ヶ月ほど経って村人が計算してみると、最も収入が多かった者が276元、少なかった者が106元、経費を除くといくらか残らない。武耕新は「これまでの規定は不合理だ。今後も葦刈りを続けていくために明日からは70%は各人に、30%を大隊の収入にしよう」（p61）と提案し、皆はまた大いにやる気を起し、休日にも帰村せず頑張る者も出てくる。

こうして個人も大隊も現金収入を積極的に図った結果、第3章に入ると“貧窮”は既に遙かな思い出になってしまっている。村には東西に走る2本のアスファルトのメインストリート、南北の10数本の道路が通じ、住宅区の家々はすべて瓦屋根でテレビのアンテナが立っている。これは理工学院建築部がこの村用に特に設計したのである。不作意に入った家の内部は寝室、応接室、仕事部屋、シャワー付浴室に分れ、カラーテレビ、冷蔵庫、“東芝”の半自動洗濯機、クーラーがある。庭には花壇、台所と倉庫があり、家族は60才あまりの農民、その息子、嫁、孫娘の4人。労働力は1人半、昨年の年収は1万6千元。

村は碁盤の如く整えられ、養魚池、ダム、変電所、果樹園を所有している。村の会議は非常に少くなり以前の3日半にわたった如きは今は皆忙しいため開かれぬ。武耕新は農工商連合公司

の支配人である。上質の布地の中山服に黒の新しい皮靴，きちんとひげを剃り頭髪を整えており，皆にも服装をきちんとしないと罰金だぞと要求している。

彼はいう。「我々の発展がなぜ早いか。都市の工業は目下調整期間中である。彼らは大きな船のように小回りがきかず管理法もまずい。我々はその隙間を見つけては基盤を固めてきた。3年，5年，10年後に都市の調整がうまくいけば人，物，財産すべて我々よりずっと優勢を占めるだろう。だから皆も固定観念を改めて，“労働によって富を得，力を売って儲ける”ことから“科学的に富を得，技術，品質，新製品を売る”ことを心がけねばならない。昨日の支部会議で我々は経済権を更に自由化し，責任，権利，利益を下部に渡すことを決定した」(p69)つまり大隊の下部組織である重工業，軽工業工場の自主性を一層認める訳である。

このように大趙庄は農業の省力化機械化を図り，剰余労働力を工場に向けて更に収入を挙げ順調に発展して来たが，それを快く思わない向きも当然出てくる。

県の第一書記李峰は病気と称して長らく入院していたが，副書記の熊丙嵐と武耕新の押し進める急激な現代化が気に入らず，両人の人気が高まるのに腹を立て熊丙嵐を転勤させ，自分が大趙庄の指導に乗り出してくる。彼は農民は農業だけをしていけばよいという考えの持主である。

熊丙嵐の支えを失った武耕新に災難が降りかかってくる。李峰のスパイによって秘書との仲を取沙汰され糟糠の妻林元秀はいたく傷つく。武耕新は妻にしみじみと述懐する。「どんな場合にも人を陥れる時には3つの方法がある。まず最初は政治問題でやっつける。それで駄目なら経済問題。この2つを俺は切り抜けた。奴らはいま3つ目の追い打ちをかけてきた。生活態度，男女関係だ。村ではこの一手が一番効目がある。調査団は俺は恐れない。何も疚しいことはないし，疑いやデマでは法廷に持ち出したところで有罪にはできない。俺が一番心配するのは村民に疑いの気持ちを抱かせることと，君や何くん（秘書）に辛い思いをさせることだ」(p117) 林元秀は夫への信頼を取戻す。結局不正発見のための調査団も1年余村に滞在して探ったものの得るところはない。

その時大虫害が発生し，周囲の村は大打撃を蒙るが大趙庄は小型飛行機を購入して薬剤散布をしたので大豊作であった。武耕新は李書記に「農業を発展させるには費用がいる。それを惜しんでどうやって現代化ができるのですか，皆は現代化を望んでいるのになぜ工業を採り入れるのを嫌うのですか」(p120)といい，李書記は何も反論できない。

終章で武耕新は過労のため暫時入院する。この地の要職にある謝徳は，入院先の高級幹部用病室に突然入って来，院長自身があれこれ気遣う病人の存在に関心を持つが，相手が農民と知ると内心面白くない。謝徳は一応は話の分る人物で農村の請負い制度にも反対ではないのだが，農民がお金を持つと派手になり都市を蝕み，社会を汚染するのでよくないと考え，武耕新が茹でたての蟹の皿をすすめてくれた際，教訓を垂れようとするところ「お見受けする所，お宅は高級幹部ですね。共産党は庶民によい暮らしをさせるために革命をしたのに，庶民の暮らしがよくなってきたのを目のあたりにすると気に入らず腹を立て嫉妬する。最高の権力は自分達が握り，高級幹部用の病室は自分達だけが使い，山海の珍味は自分達だけが食べ，庶民はボロ屋に住み，まずい物を食べ



ていれば気持がよいのですか」(p125)と逆襲され「そうではなく過去の苦しさを忘れず、前を向いて歩め、お金に向って歩めば必ず道を誤る(向前看と向銭看は同音)」という「頭をあげて前を見、頭を下げてお金を見る。お金を見てこそ前途が見える。お金を考えずにどうして現代化ができますか」(p125)と両者は口論になり、謝徳は永年の自分の理論が一農民さえ説得できないのに衝撃を受け退院してしまう。

数日後、内部参考文件(限られた人のみ見ることができる資料)に《農村のボス進んで向銭看を選ぶ》と題する文が発表された。これがまた何かの導火線になるのだろうか。

というところでこの小説は終っており、寒村から富裕な農村に変貌することに一応成功したものの、今後の楽観は許されない農村幹部の苦闘と悲哀の物語である。作者は作中人物にはっきりと現代化とはお金の問題だと言わせており、李峰や謝徳を揶揄したうえ、特定の幹部個人への批判を超えて直接共産党への批判もしているが、このあたり一般庶民の心情を代弁しておりそれをはっきり言えるようになったことは文芸界における現代化の一つのあらわれであろう。もともと現代化とは農業、工業、科学、軍事の4つの現代化が提唱されたのであるが、現在では4つの分野に止めることは不可能で政治・経済を含めたあらゆる分野で現代化への要求は切実なものとなっている。現代化とは庶民にとって端的に言えば貧困からの脱却といえよう。武耕新に言わせているように単純労働を売っていたのでは暮しはいつまでも楽にはならない。現在の中国は80%の農民が20%の都市人口を養っているのだが、その比率は逆にできる筈である。人海作戦を機械に切替え労働力を工業に吸収して更に利潤を高める。そんなことは中国の為政者は当然知っている。何故なら現代化された快適な生活の快よさ(変な言い方だが)を彼等は享受しているのだから。利潤を高め人民の生活水準を向上させることに共産党は嫉妬深いとも武耕新は言っているが、この問題は後でもう一度触れたいが、共産党はただ理由なく嫉妬深いのではあるまい。人民が豊かさ、快適さを知りより豊かさを追及する時、そのエネルギーは中国の体制を揺がすものとなる。革命の主導勢力であった共産党は現在、必然的に体制を守る勢力とならざるを得ないかに見える。

#### 引用文献

- 劉心武 「日程緊迫」群衆出版社、1985年6月第一版  
 日程緊迫  
 登麗美
- 張賢亮 「男人的一半是女人」中国文聊出版公司、1985年12月第一版
- 譚 容 「真真假假」上海文芸出版社、1983年10月第一版
- 蔣子龍 「1984年 中篇小説選」(第二輯)、1985年8月第一版  
 燕趙悲歌